雪の透く袖

鈴木鼓村

青空文庫

古びた手帳を繰ると、明治廿二年の秋、私は東北の或聯隊に軍曹をして奉職していたことがあった。丁度その年自分は教導団を卒業した、まだうら若い青年であった。

当時、その聯隊の秋季機動演習は、会津の若松の近傍で、師団演習を終えて、後、我聯隊はその地で同旅団の新発田の歩兵十六聯隊と分れて、若松から喜多方を経て、大塩峠を越え、磐梯山を後方にして、檜原の山宿に一泊し、終に岩代、羽前の境である檜原峠を越えて、かの最上川の上流の綱木に出で、そして米沢まで旅次行軍を続けたのであった。

時は十一月の中旬、東北地方は既に厳霜凄風に搏たれて、ただ見る万山の紅葉は宛らに錦繍を列るが如く、到処秋景惨憺として、蕭殺の気が四隣に充ちている候であった、殊にこの地は東北に師団を置きて以来、吾々が初めて通る難路のことであるから、一層に吾々の好奇心を喚起したのであった。第一、この会津地方には一般怪談の如きは乏しくない、殊に前年即ち明治廿一年七月十五日には、かの磐梯山が噴火して、為めに、そのすぐ下に横たわる猪苗代湖に注ぐ、長瀬川の上流を、熔岩を以て閉じた為めに、ここに秋元湖檜原湖と称する、数里にわたる新らしい湖を谿谷の間に現出した、その一年後のことであるから、吾々の眼にふるる処、何れも当時の惨状を想像されない処はなかった、且つその山麓の諸温泉には、例の雪女郎の談だの、同山の一部である猫魔山の古い伝説等は、吾々をして、一層凄い感を起さしたのである。

そして、この檜原の宿とても、土地の人から聞くと、つい昨年までは、その眼の前に見える湖の下にあったものが、当時、上から替地を、元の山宿であった絶頂の峠の上に当る、この地に貰って、漸くに人々が立退いたとのことである。

吾々は、次ぎの日に、この新らしき湖を、分隊毎に分れて、渉ったが、この時の絶景といったら、実に筆紙にも尽し難い、仰向いて見れば、四方の山々の樹々が皆錦を飾って、それが今渉っている、真青に澄切ってる、この湖に映じて、如何な風流気のない唐変木も、思わず呀と叫ばずにはおられない、よく談話にきく、瑞西のゲネパ湖の景も、斯くやと思われたのであった、何様、新湖のこととて、未だ生々しいところが、往々にして見える、船頭の指すが儘に眺めると、その当時までは、村の西にあって、幾階段かを上ったという、村の鎮守の八幡の社も、今吾人の眼には、恰もかの厳島の社の廻廊が満つる潮に洗われておるかのように見える、もっと驚いたのは、この澄んでいる水面から、深い水底を見下すと、土蔵の白堊のまだ頽れないのが、まざまざとして発見されたのであった、その他湖上の処々に、青い松の木が、ヌッと突出ていたり、真赤に熟した柿の実の鈴生になっておる柿の木が、とる人とてもなく淋しく立っているなど、到底一寸吾々が想像のつかぬ程の四辺の光景に、いたく異様の感を催して、やがてかの東北有数の嶮阪なる〇〇峠を越えて、その日の夕暮近く、兼て期定されたる、米沢の宿営地に着したのであった。

ところが、この地に着いて、偶然私は憶出したのは、この米沢の近在の某寺院には、自分の

母方の大伯父に当る、某といえる老僧が居るという事であった。幸に私は一日の閑を得たので、二三の兵卒を同道して、初対面のこの大伯父の寺を訪れたのである。老僧は八十有余の善智識であって、最早五十年来、この寺の住職である。初対面の私を種々厚遇してくれて、さて四方山の談話の末に老僧がいうには、「お前達は、まだ齢若い血気の少年であるから、幽霊などがあるといったら、一概に貶すことだろうが、しかしそうばかりではなくこの世には、実に不思議なことが往々にしてあるものだから、今私がお前達にも談してきかせよう」と如意片手に、白髯長きこの老僧が、改って物語る談話を聞けば、こうである。

「それは、まだ自分がこの寺の住職になってから、三四年の後のことであった、自分もその時分は三十前後のことだったが、冬のことで、ふと或晩、庫裏の大戸を叩いて訪れるものがある、寺男は最早寐ていたが、その音に眼を覚まして、寝ぼけ眼をこすりこすり戸を開けて見ると驚いた、近所に稀れな、盛装した、十八九の娘が立っていて、方丈の私に是非会いたいというのであった。寺男も、この冬の晩遅くそんな女が、私に会いに来たのだから、余程、不思議に思って、急いで私の居間に来て、その由を告げた。私は少し思う所があったので、早速、その頃寺に居た徒弟共を一室に集めて、さて静かにいうには、今当山に訪れたものは、お前達も兼て知っておる通り、この一七日前に当山に於て葬礼の式を行った、新仏の○○村の豪家○○氏の娘の霊である、何か故のあって、今宵娘の霊が来たのであろうから、お前達も後々の為めに窃かにこれを見ておけと告げて、彼等徒弟は、そっと一室に隠れさしておき、寺男には、その

娘に、中門の庭より私の居間へ入来る様に命じてやった。私は直に起ってそこの廊下の雨戸を一枚明けて、立って待っておると戸外は朧の夜で庭の面にはもう薄雪の一面に降っていた。やがて中門より、庭の柴折戸を静かに開けて、温雅に歩み来る女を見ると、まぎれもないその娘だ、文金の高島田に振袖の裾も長く、懐中から垂れている函迫の銀の鏈が、その朧な雪明りに、きらきらと光って見える、俯向き勝ちに歩むその姿は、また哀れが深くあった、私は懇ろに娘を室に招じて、来訪の用向を訊ねると、娘は両手を畳につきながらに、物静かにいうには、実は妾は何某の娘で御座いますが、今宵折入って、御願に上った次第というのは、元来妾はあの家の一粒種の娘であって、生前に於ても両親の寵愛も一方では御座いませんでした、最早妾の婚礼も日がない、この一七日前に、妾は遂に無常の風に誘れて果敢なくなりました身で御座います、斯様な次第故、両親の悲歎は申すも中々の事、殊に母の心は如何ばかりかと思えば、妾も安堵して、この世を去り兼ねまするに、更らに、母は己の愛着のあまり、死出の姿にかうるに、この様な、妾が婚礼の姿をその儘着せてくれまして、頭の髪も、こんな高田髷に結うて、厚化粧までしてもらったので、妾は益々この世に思が残って、参るところへ参られぬ始末なので御座います、何卒方丈様の御功徳で、つゆも心残りなく、あの世に参れますよう、実は御願に只今上りましたので御座いますと、涙片手の哀訴に、私は直ちに起って、剃刀を持来って、立処に、その娘の水の滴るような緑の黒髪を、根元から、ブツリ切ると、娘は忽ちその蒼白く美しい顔に、会心の笑を洩して、一礼を述べて後、妾がほんの志ばかりの御礼の品に

もと、兼てその娘が死せし際に、その柩に納めたという、その家に古くより伝わった古鏡と、それに、今切落した娘の黒髪とを形見に残して、喜んで再び庭より飛石伝えに中門へ出で行く姿を見ると、最早今は全くこの世を思切りしものか、不思議な事は、スラリとしたその振袖姿の、袖や裾のあたりが、恰度蝉の衣のように、雪明りに透いて見えて、それを通して、庭の梧桐や金目などの木立がボーッと見えるのである、娘は柴折戸のところへ来ると今雨戸のところに立って見送っていた、私の方を振返って、莞爾と挨拶したが、それなりに、掻消す如くに中門の方へ出て行ってしまった、この後は別に来なかったから、それで全く心残りなくなったものだろう、その黒髪と古鏡とは即ちこれだ」と先刻納所をして、持ってこさした、桐の箱を開けると、中から出たは、パサパサになった女の黒髪と、最早曇って光沢のない古鏡であったので、当時血気な私初め傍に黙って聞いていた兵卒も、思わずゾッと戦慄したのであった。

私は、その日この寺を辞して、宿所に帰ったが、この品は未だに、この寺に残っておるのである。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇　百物語怪談会」ちくま文庫、筑摩書房
　2007（平成19）年7月10日第1刷発行
底本の親本：「怪談会」柏舎書楼
　1909（明治42）年発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2008年9月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の透く袖

鈴木鼓村

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/